VOICE.21

ONE'S voice

野田秀樹 × アイタイヒト

野田秀樹

YOSHIE NAKANO × HIDEKI NODA

中納良恵

自分が受け皿になったほうが自由で楽しいこと、あるんですね。

ロック、ジャズ、ブルース、歌謡曲など多彩なルーツを感じさせながら、この人が歌うと唯一無二になる――。
強力なオリジナリティと抜群のパフォーマンスで人気を誇るEGO-WRAPPIN'のヴォーカリスト、中納良恵。
以前から、その声と音楽性の大ファンだった野田秀樹たっての希望で対談が実現。
中納が初めて参加する、野田が総監修を務める9月の《東京キャラバン in 京都・二条城》の直前にこの対談は行われた。

自分の気に入ったものだけでは良い作品にならない

野田　良恵さんとゆっくり話すのは、実は今日が初めてなんですよね。芝居を観に来てもらってはいましたけど、30分以上話したことはない。

中納　楽屋でご挨拶して雑談程度でしたね。

野田　最初にEGO-WRAPPIN'の曲を知った時のことはよく覚えているんです。1999年につくった『パンドラの鐘』という芝居の稽古中に、スタッフが「絶対に野田さんが好きな曲だよ」と『色彩のブルース』を聞かせてくれて「本当だね、ものすごくいいね」と。それから僕はずっと一ファンでしたけど、会えるようになったきっかけは何だったのかな？

中納　奥様とは古い知り合いだったんです。昔、イベントで何度かお会いしたことがあって。後々、野田さんと結婚されたと聞いて「そうなの？ すごいな」と言っていたんですよ。

野田　僕とはまだ、ここ数年のお付き合いですけど。

中納　舞台は以前からずっと観たいと思っていたんですけど、『逆鱗』（2015年）でようやくタイミングが合って拝見できました。もういろいろ圧倒されて、去年の『足跡姫』も見せていただいて。

野田　確か『逆鱗』はスカパラさん（東京スカパラダイスオーケストラ）と同じ日でしたよね。あの日の客席は異様にミュージシャン率が高かった（笑）。スカパラさんを《東京キャラバン》にお誘いしたのはそのあたりでしたけど、良恵さんにも同じ頃に言ったのかな、「こういう話があるんですけど、興味ありますか？」って。

中納　即答で「あります、参加したいです」と答えました。

野田　僕の勝手なイメージですけど、ミュージシャンはやっぱり、朝に弱いんですか？

中納　他の方はわかりませんけど、私はすっごく弱いです。夜の間、寝たくないんですね。ずっと起きていたい。でも、人間は朝の光を浴びるのが一番健康に良いと聞いて、ここ2年ぐらい、ようやく調整しているところです。

野田　2年でそんなに変われますか（笑）。

中納　少しずつですけど（笑）。年齢的なことを考えると、それぐらいはしようかと。

野田　夜の間、何をして過ごしているんですか？

中納　何ということはなくて、ただ音楽を聞いたりとか、あとはネットサーフィンですかね。曲作りの時期なら、歌詞を考えたりしています。

野田　これもミュージシャンの方に聞きたかったんですけど、曲を作っている時、逃げたいとか思いますか？

中納　そういう時もありますけど、まあ、とりあえずやってみるという感じですね。ただ、歌詞とメロディがどうしても一致しなくて煮詰まったりすると「この曲は次にチャレンジだ」と思って放置したり。

野田　そういう曲は永久に世に出ない？

中納　いや、正直、（完全に納得がいかなくても）世に出てしまったものもありますね。

野田　わかります（笑）。僕も芝居を書いていて「この部分で嘘をついてしまったな」と思ったまま発表したこと、ありますから。それがどの作品のどこかは、墓場まで持って行こうと思っていますけど。

中納　私も絶対に言えないですけど。

野田　まさか『色彩のブルース』じゃないですよね？

中納　違います（笑）。

野田　でも世に出すと、意外にもそういう作品を褒めてくれる人がいるんですよね（笑）。

中納　いますねえ。でもやっぱり自分としては、そういう曲はライブで演奏したくないんです。それを知らない相方（EGO-WRAPPIN'のもうひとりのメンバー、森雅樹）に「今度のライブであの曲やろう」と言われて「いや、ちょっと止めておこう」と言ったりして。ただ、つくってから何年か経って、たまたまライブでやったらすごく好きになった、ということもあります。不思議ですけど。

野田　自分が気に入ったもの、納得のいったことだけを並べて、それが本当に良い作品になるかというと、実は違うんですよね。自分の作品の個性や長所は、人から指摘されて気付くことが多いじゃないですか。「ああ、そういうところが評価されるのか」と。僕の作品は昔から、言葉遊びが特徴と言われているんですけど、自分にしてみたら駄洒落を書いていただけだし（笑）。それと、若い頃は集中して長ぜりふを言っていると自然と目が寄ったんですが、自覚はまったくなくて、そう指摘されたことで逆に、意識して視線を寄せることで集中できるようになったりしました。言ってみれば、他人が喜んだり褒めたりしてくれることで、自分の才能を教わる。

中納　それ、おもしろいですね。

野田　良恵さんもそういうこと、ないですか？　音楽や美術は、演劇よりもそこがはっきり形になりそうだから、自分に才能があるかどうか早めに自覚できるのかと思ったんですけど。歌い始めたのはいつ？

中納　私はそんなに早くないんですよ。22歳の時ですから。ピアノは母が教えていたので、子供の頃から習っていましたけど。

野田　自分はすごいなって思っていました？

中納　いや、全然。ピアノは駄目なんですよ。ただ、小さい時から歌が好きで好きで、絶対に歌手になるという気持ちはありました。

野田　それはきっと気付いてましたね、早いうちから自分の能力に。

中納　そういう意味では、若い時のほうが変な自信みたいなものはありましたね。歌手になりたいと言うより「絶対になれる」みたいな。でもやればやるほど、考えることが増えていきました。「本当に自分には才能があるのかな？」とか。昔はそんなことはまったく考えなかった気がします。

野田　そういうことを考えるようになったら、ちょっと違ってきますよね。少

YOSHIE NAKANO × HIDEKI NODA

なくとも、無邪気ではいられない。

中納　そうですね。もう一度自信が持てたとしても、昔とは違う。野田さんはたくさん作品を書かれてきましたけど、不安とか感じられますか？

野田　不安の種類が変わってきました。この年齢になると、新作と言って世に出すものが、自分では新しいつもりだけど、前にも同じようなことを書いたんじゃないかと心配になります。自分は気付かないけど、誰かに「前と同じだ」と言われるんじゃないとか。

中納　うわ、それはかなり大変ですね。

野田　と言っても、少しずつ居直るようになって来ていますが（笑）。画家だって、だいたい同じ題材を描き続けている。ひとりの人間の頭の回線って、そんなに若い頃と変えられるものでもないと思いますし。

中納　私は、メロディよりも言葉というもののほうが難しくて、歌詞にいつも苦労するんです。だから野田さんのせりふを聞いていると、知っている言葉なのに「あ、そうか、こんなふうに使えるのか」とびっくりすることがよくあって。そんなふうに悩んでいらっしゃるとは思いもしませんでした。

野田　でも歌詞は難しいですよ。僕も何回か書きましたけど、せりふとはまったく別物ですね。演劇では七五調とか気にするくせに、歌詞は完全に自由に書いて、曲をつけてくれた某ミュージシャンに「とても大変だった」と言われたことがあります（笑）。

中納　ふふふ。言葉自体にもメロディがあるから、私の場合は曲がパーッと出て来た時に、自然と一緒に付いて出て来る言葉があるんです。それをヒントにしていつも歌詞を書いているんですけど、やっぱり日々のテンションによって、付いて来る言葉が違ったりするんですよね。つまり、ブレるんです。だから１曲ずつ、もう少し自分が書くものを掘り下げないといけないなといつも思います。ただ、考え過ぎると（アウトプットの）扉が無くなってしまうから、衝動みたいなものは大事にしようとも思っていて。そのバランスが難しいです。

舞台の俳優さんは全身から エネルギーが出ている

野田　EGO-WRAPPIN'さんは、テレビにはあまり出ないですよね。

中納　出ないですね。向いていないと思います。テレビ映えしない。

野田　いや、そういう問題じゃないんです。テレビの人達って、間を怖がるじゃないですか。テレビそのものが沈黙しちゃいけない媒体だから。でも良恵さんはわりと……。

中納　ああ、そうですね、そんなに話さない。テレビもパッと行って、パッと歌うだけならいいんですけど。

野田　ぜひそのままでいてください（笑）。

中納　テレビと言えば、私、まだそんなに舞台を観たことがないんですけど、ドラマではすごくいい女優さんだと思っていたのに、舞台では……

野田　ああ、駄目な人がいる（笑）。

中納　あれは何なんですか？

野田　まず、声の力があると思うんです。テレビはどんなに小さな声だってマイクで拾いますから、そっちに慣れてしまうと、声そのものの力が鍛えられない。しかも最近の映像の流れとして、むしろ小さい声でボソボソッと話すほうがナチュラルで、演技が上手いとされている。ナチュラルであることと演技力はまた違うんですけどね。

中納　それはどっちがいいとかあるんですか？　そもそも演劇と映像では基礎が違うとか？

野田　本当に上手い人は、どっちもできます。どちらをやっても素晴らしい。大竹しのぶさんや橋爪功さん、樹木希林さんもそうですけど、映像の時は映像の声の使い方ができるし、舞台になると全く違うテンションでできる。テンションと言うのは、高いとか低いということではなくて、その役、その場所に必要なエネルギーが出せる。

中納　何と言えばいいのかよくわからないんですけど、こう、エネルギーというかオーラというかが、全部から出ている感じがするんです、舞台の方って。背中とか、頭のてっぺんとか、360度から。

野田　最近のテレビは特に、ここ（首）から上が重視されがちかもしれませんね。舞台はむしろここ（腰）から下の世界だから。しっかり立てていない人は、せりふを聞いても説得力がないんですよ。だって、腰が引けてヘコヘコ歩くような人のせりふは聞きたくないでしょ（笑）。結構いるんですけどね、そういう俳優。

中納　でも、舞台で栄える人は、大抵、テレビでも映える気がします。『足跡姫』の宮沢りえさん、すごかったです。私、テレビでしか見たことなかったので、オーラも圧倒的で……。

野田　そう、りえちゃんも映像と舞台のどちらもやれる人ですね。いや、彼女には特別な力があります。常に自分の技術以上のことに向かって行く。あそこまでの俳優は希有です。

中納　『逆鱗』の松たか子さんにも同じことを感じました。すごい方だなあと。

野田　たかちゃんにもまた特別な魅力があります。あの人はとりわけ声が良い。柔らかいし、力があるし。あと育ちがいいんだね。人の前に出ようとか、一切しない。僕をはじめ、普通、俳優にはそういう下卑た欲があるんです（笑）。でも観ている人は、彼女に惹き付けられる。

中納　確かにそうですね。

野田　そうそう、スカパラさんが《東京キャラバン》に参加してくれたのも、もともとは彼女が紹介してくれて『逆鱗』を観に来てくれたことがきっかけなんですよ。旦那さん（ギタリストでプロデューサーの佐橋佳幸）が知り合いで。彼女は去年やった《東京キャラバン》のプロローグにも出てくれたし、今年は良恵さんとコラボしてくれることになりそうなので、僕は個人的に、異常なまでに興奮しているんです。

中納　野田さんに声をかけていただいて、私もうれしかったです。以前の映像を見させていただいたら、いろんな伝統芸能の方たちが交わってというか、さまざまなジャンルが次々と繰り広げられていくのがおもしろくて、自分もぜひ立ってみたいと思いました。今までそんなことはしたことがないので、ちょっと挑戦させてもらいたいなと。

野田　生で、他のジャンルのものすごい人を見ると、刺激になりますよ。この間も、芸妓さん、舞妓さんの踊りや祇園祭鷹山保存会の演奏に、「Atoa.（アトア）」という仙台の和太鼓グループが入ったら、京都の人たちの気合いがその場でグワッと上がったのがはっきりわかりました。

中納　共鳴するんでしょうか。

野田　そういうことなんですね。それが《東京キャラバン》ならではの、ただ競っているんじゃない、お互いの良さを渡し合ってる感じがしました。それは毎回、どの組み合わせでもありますね。

中納　私、あんまりインプロヴィゼーションとかしたことはないんですけど、ミュージシャンの大友良英さんが、自分から発信するんじゃなくて、相手が（音などを）出しやすいように受け皿をつくることなんだとお話しされていたのを聞いて、感銘を受けたというか、気付かされたんですね。それまでは、インプロとかコラボって張り合うものなのかなと思っていたんですけど、そうじゃなくて、相手の受け皿になるんだと考えたら、すごくやりやすくなったことがあったんですよ。受け皿というのはきっと「押す」より「引く」というか、自分を開いていくことなんだろうなと。だから今度の《東京キャラバン》も、自分が他のジャンルの方たちと交わった時に、開いていけたらいいなと、今すごく思っているんです。

野田　準備としては完璧ですね（笑）。

中納　例えば音楽のフェスでは、言ってみれば出演者全部が対バンというか、プロモーションの場やなと思っているんです。私たちのことを全然知らない人もお客さんの中には当然いるじゃないですか。そういう人に自分たちの音楽を知ってもらう絶交のチャンスだから「今度のEGO-WRAPPIN'のライブに来ーい！」と念じながらやってます（笑）。

野田　あはは、それ、伝わりそうですね。

中納　上手く伝わらない時もありますけどね。そういう日はライブが終わったあと、隅っこで三角座りしています（笑）。

野田　僕もありますよ。客席のある場所のお客さんを観て、その反応に惑わされることが。

中納　「途中でいなくなった！」とか。

野田　それで１日いやーな気持ちで過ごして。

中納　そういう時、野田さんはどうするんですか？

野田　時間が経つのを待つだけですね。

中納　ひと晩寝れば復活しますか？

野田　いや、もう少しかかります。翌日の舞台をまたやって、「いや、やっぱりいいよ、この舞台は」と自分で納得し直すのが定番です（笑）。でも、もともと気にしていたことが勘違いの場合もありますよね。途中で帰ったお客さんは、実は何か事情があったとか。だからあんまり惑わされちゃいけない。

中納　《東京キャラバン》はお客さんの層がイメージできないんですけど、でも普段とはまったく違う方たちに出会えそうで、それも楽しみです。

野田　『真夏の夜のジャズ』（1958年のニューポート・ジャズ・フェスティバルを収録したドキュメンタリー映画）ってあるじゃないですか。

中納　あ、大好きです！

野田　あの映像は最高ですよね。

中納　最高です！

野田　僕も、あれをビデオでも買ったし、今はなきレーザーディスクも買ったし、DVDでも買って、つまりハードが変わる度に毎回購入しているくらい好きなんですけど、あの中に出てくる歌手のアニタ・オデイ、実はあれをイメージしているんです、《東京キャラバン》の良恵さん。

中納　ええー！

野田　それをこう、何か邦楽器との組み合わせで出来たりしないかなと。

中納　アニタ・オデイは素晴らしいです、けど、それはちょっと、ハードルが高い、です……。

野田　具体的なアイデアはこれからというか、実際にやってもらわないとわからないですけど、何となく、上手くいきそうな気がしているんですよ。それは自分でも、かなり楽しみにしていることなんです。

取材・文：徳永京子　写真：渡部孝弘

今回のアイタイヒト

中納良恵 YOSHIE NAKAO

EGO-WRAPPIN'ヴォーカリスト。1996年 中納良恵(Vo.作詞作曲)と森雅樹(G.作曲)によってEGO-WRAPPIN'結成。「色彩のブルース」や「くちばしにチェリー」は、多様なジャンルを消化し、エゴ独自の世界観を築きあげた名曲として異例のロングヒットとなる。2016年には結成20周年を迎え日本武道館でワンマンライブを行い、その模様を収録したLive Blu-ray&DVD「ROUTE 20 HIT THE BUDOKAN ～live at 日本武道館～」を2017年3月15日にリリースした。EGO-WRAPPIN'の活動と並行して2007年にはソロ1st Albumとなる「ソレイユ」2015年には2nd ソロアルバム「窓景」をリリースし、ツアーも行う。またYuji Ohno & Lupintic Fiveに招かれ「ルパン三世のテーマ」の歌唱や、東京スカパラダイスオーケストラ、セルジオ・メンデスなど国内外様々なアーティストの作品にヴォーカリストとして参加している。
EGO-WRAPPIN'オフィシャルサイト：www.egowrappin.com/
中納良恵オフィシャルサイト：www.nakanoyoshie.com/

野田秀樹 HIDEKI NODA

劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京キャラバン総監修。92年に「劇団 夢の遊眠社」を解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『パンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『MIWA』『逆鱗』『足跡姫～時代錯誤な幽霊～』など、様々な話題作を発表。モーツァルト歌劇『フィガロの結婚～庭師は見た!～』等、オペラの演出、海外での共同制作や、2017年8月には、9年ぶりとなる八月納涼歌舞伎『野田版 桜の森の満開の下』で歌舞伎の脚本、演出を手がけ、大きな反響を得る。演劇界の枠を超え国内外で精力的な創作活動を行っている。2015年よりブラジル、東北、東京など国内外の多種多様なアーティストとの文化混流による文化サーカス「東京キャラバン」を実施。2017年9月、世界遺産・二条城で「東京キャラバンin 京都・二条城」を開催。松たか子、中納良恵ら類稀なる表現者達と新たな表現を創出し、幻想的なパフォーマンスを発表。2017年11月には、十八代目中村勘三郎とのタッグで話題を呼んだ、伝説の作品「表に出ろいっ!」英語版の上演が決定している。

作・演出:野田秀樹

特集はP1へ

「表に出ろいっ!」English version

“One Green Bottle” 英語上演・イヤホンガイド（日本語吹き替え）付

※吹き替えキャストに大竹しのぶ、阿部サダヲが決定!

東京キャラバン2017　http://tokyocaravan.jp/

野田秀樹が総監修する“旅する文化ムーブメント”